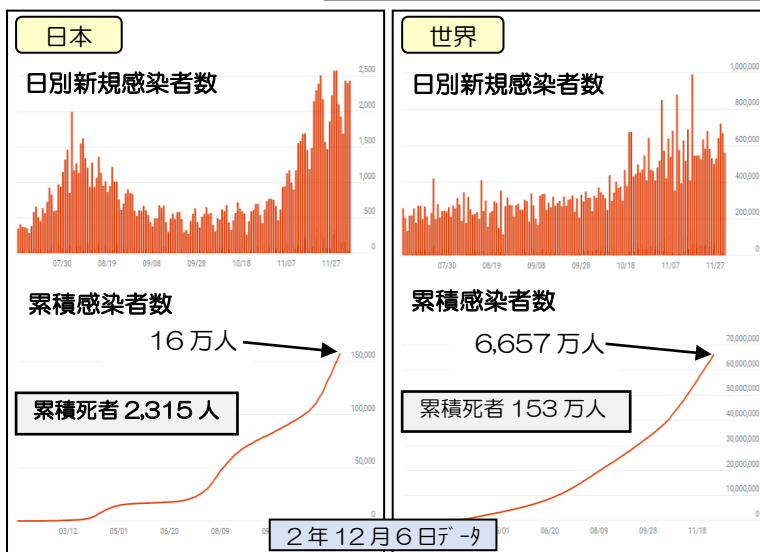


新型コロナウイルス感染症 令和時代の出端を控く

昨年一月、WHOが「新型コロナウイルス感染症」と命名し、その感染拡大を防止するため、各国で緊急事態宣言等して対応してきました。

浜風会は地域の歴史を掘り起すことを旨としています。私達は今の世界的大流行（パンデミック）の真只中にいます。この事態をどう捉えたら良いか、正しく恐れ、ウィズ・コロナにどう立ち向かったら良いか、各種情報を参考にまとめてみました。



後世に甚大な影響を与えた主な感染症 人類は感染症との闘いでもあった

感染症名	発生年	世界死者数
ペスト 「黒死病」	14～ 19世紀	1億人
インフルエンザ スペイン風邪	1918	5,000万人 ～1億人
インフルエンザ アジア風邪	1957	200万人
インフルエンザ 香港風邪	1968	100万人
コロナウイルス SARS	2004 ～2006	1000人
新型 インフルエンザ	2009	1万人
新型コロナウイルス (現在進行中)	2019	153万人～

一昨年12月中国、湖北省武漢市で確認されて以降、感染は世界に広がり発生から丸一年、毎日その感染状況が報道されていますが、最近の感染拡大に憂慮しています。（上図参照）

感染は感染者のくしゃみや、咳等飛沫と一緒にウイルスが放出され、他の人がそれを口や鼻から吸い込む飛沫感染と、感染者がくしゃみや等押さえた手で周りの物に触れ、感染者のウイルスが付き、それを他の人が触れる接触感染があります。マスクをすること、手の消毒をすることが対策のポイントと言われる所以です。

新型コロナウイルス感染症とは
ウイルスは直径0.1μmの球状で形態が王冠に似ているとギリシャ語で王冠を意味するコロナという名前がついています。

感染は感染者のくしゃみや、咳等飛沫と一緒にウイルスが放出され、他の人がそれを口や鼻から吸い込む飛沫感染と、感染者がくしゃみや等押さえた手で周りの物に触れ、感染者のウイルスが付き、それを他の人が触れる接触感染があります。マスクをすること、手の消毒をすることが対策のポイントと言われる所以です。

新型コロナウイルス感染症の症状と兆候

典型的な兆候は、発熱、空咳、倦怠感、喀痰、息切れ等と言われ、症状の無いものから重症の肺炎に至るまで、それは厄介な感染症です。
昔は神仏への祈りひたすら

感染症の対策は、現在では病原菌の発見からワクチンの開発そして提供となりますが、そういうことが全然わからない時代の「流行り病」の恐怖は、想像を絶するものです。有史以前よりあったと言われている感染症、20世紀になってからも左上表のように度々発生しています。人々は必死にお祈りしたことでしょう。

この地にもその一端が見られます。八阪神社の「お天王様」のお祭りは現在も続いています。江戸時代の古文書や、寄付された鳥居や灯籠に見ることが出来ます。その他、津島神社から勧請した祠（ほくら）が篠原の地に七つもあり、地元の集落では定期的にお祈りしています。

新型コロナウイルス感染症に打ち勝とう

第三波の感染拡大の最中、イギリスでワクチン接種が始まるというニュース。

今年は収束の方向へ向かうよう祈るばかりです。新しい生活様式で健康管理を徹底していきましょう。（山下勝彦）

第37号、他頁の紹介

2～3頁：防潮堤

立派に完成

4頁：NHK 番組取材2題



コンクリートで覆った舞阪
工区を内側から写す

防潮堤 立派に完成 海も浜も変わらない

この程、待望の防潮堤が完成した。昨年11月15日その完成報告会が海浜公園で行われた。浜松市沿岸域防潮堤整備事業

この事業は、平成23年の東日本大震災被害を目の当たりにした上、南海トラフ巨大地震で

莫大な津波被害想定が発表されている中、平成24年(株)一条工務店グループから静岡県に対し、浜松市沿岸域の防潮堤整備の費用として、3年間で300億円を寄付すると表明されたことを契機にしている。これを原資に「オール浜松でやらいまいか」と市民も参加して推進された。

天竜川西岸から、今切口までの約17.5kmについて、標高13～15mの防潮堤整備を平成24年に事業を着手、平成25年から工事を開始、令和2年3月に竣工した。東日本大震災から僅か9年で完成したことになる。千年に一度と言われる巨大地震、めったに起きないとは思いつつも、もし起こったら、先ず避難せよと言われているが、この地域は平坦な所なので適当な避難場所が無いのが実状であった。この完成で救われる。本当に有難いことである。

工事上の特筆事項

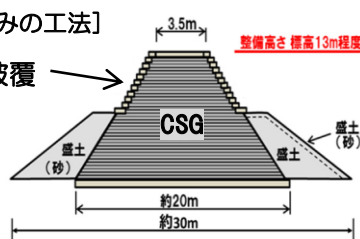
一番重要なことは、巨大地震の破壊力に耐えられるかということであるが、次に自然環境面や植栽を通して海岸防災林機能の維持向上、景観や利用面にも配慮することをコンセプトに事業はスタートした。心強いことである。

① 最新技術CSG工法の採用

これはCemented Sand Gravelの略。近傍で容易に入手できる砂利等にセメント、水を添加し簡易な混合設備により製造される材料

〔舞阪工区のための工法〕

コンクリート被覆



〔坪井以東の工法〕



右の写真は坪井に設置してあったCSG製造のプラントで、最大2800m³/日の現在稼働中では日本最大級の施設であった。



で、地震動や津波に対し十分な強度をもつ。津波が超波しても、洗掘されない粘り強い構造である。地震による堤体自体の沈下量が小さい。施工管理や品質管理が容易等の特長がある。上図のように二つの工法が使われているが、中身は同じCSGである。

② 環境面の様々な活動

この事業には市民参加として、地元、民間、学識者、行政で組織する、自然環境検討委員会や植栽計画検討会等を通じて、環境面について提言や対策を実施してきた。アカウミガメやオオカメ等の動物や貴重植物に対し、工事による影響が極力ないよう配慮してきている。

左写真は市民参加の植栽風景である。これは平成28年5月、380名もの大勢の市民が参加で、抵抗性クロマツや、広葉樹のタブノキ、クロガネモチ、ヤマモモ等が植えられた。これらのことが着々行われたことを忘れてはならない。

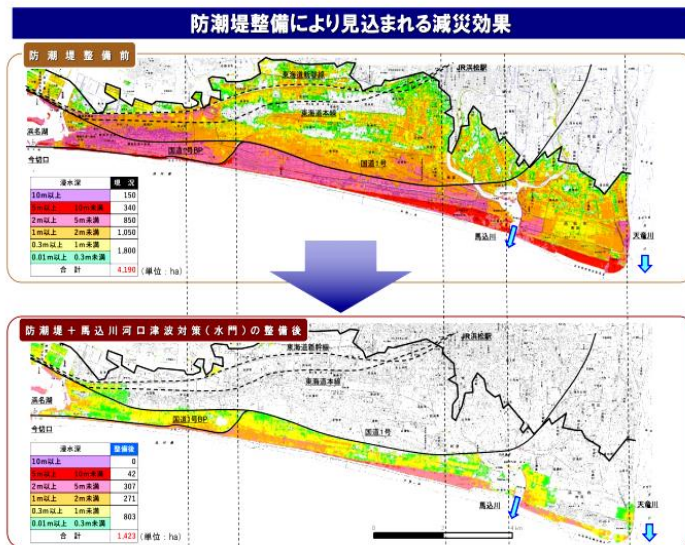


防潮堤の減災効果

馬込川河口に水門を整備した後の推定であるが、整備前に比べ

- ・ 宅地の浸水面積を約8割低減、
- ・ 宅地の浸水深さ2m以上を98%低減

と、試算されている。期待して良さそうだが、左図は静岡県が発表した防潮堤施設前後の浸水予想図である。



(以上、静岡県公式ホームページを参照)
完成した防潮堤を眺めて

舞阪工区では、防潮堤の内側に大きな駐車場

が設けられ、堤防に登るスロープがあり、登ってみると、西遠方に浜名大橋、近くには舞阪灯台をそして海岸は、遙か伊良湖岬から東は竜洋町風車を望むことができる。防潮堤の完成は都会的な新しい観光スポットの出現となった。

新しい浜との付き合いは

工事が終わった浜では、多くの釣り人が竿をたれ、親子連れが遊び、サーファー達が波間でしぶきをあげる風景が戻った。

アカウミガメの上陸、産卵も従来どおり迎えられる、また海浜植生の復元再生も自然の力で進んでいくことを見守っていくという。

初日の出、12月の「地の神様」や大晦日の浜ごり等の心のふるさとの行事は出来る。

高い堤防によって浜との関わりが遠のくかと心配したが、何か一安心だ。この巨大な防潮堤のお陰で安全になり、安心となった。しかし過信してはいけない。過去の震災の教訓である。

(山下勝彦)



NHK番組取材2題

新型コロナウイルス感染拡大が心配される中、続けて2つの番組から浜風会に取材がありました。彼らは会員にインタビューし、話題にする現場を回りました。その時の模様を紹介します。

新日本風土記 妖怪の国・精霊の森

今年はコロナ禍でアマビエが話題となりました。現実の自然の現象を基にした昔話と登場する不思議な生きものには興味深いものがあります。遠州灘の波の音と「波小僧」の話も広く知られています。海に近い所で生活をしている私たちは、波の音をどのように意識しているか、「波小僧」の話はどう伝承されてきたかが取材のテーマでした。海が生業の場ではなくな

ってから数十年も経ち、日々の生活での天気心配は専ら放送に頼る時代になっています。海辺の村に住む者としてはきつい問いかけで、この取材に何が答えになるか心配でした。

日本人のおなまえ 佐藤VS鈴木 名字頂上決戦

日本で一番鈴木姓が多い自治体は浜松市、その中で特に集中している篠原町を話題にしたというのです。この番組はバラエティで視聴率も高い、面白くまとめていくので展開は予想がつきません。

すでに新型コロナウイルス非常事態宣言が解除になりましたが、東京からの撮影チームには少し恐れを感じつつ、取材も浜風会以外への接触はしないと言う気遣いがされました。

まず協働センターで、現在の字別の分布を大きな展示物で説明し、鈴木の名前はどこから伝わりどうしてこんなに多いのか考えられることを説明しました。



権現集落での鈴木氏の調査風景
どの家も鈴木で、ディレクターもびっくり。当日は日曜日だったが誰も見に来なくて、安心しました。

続いて現地取材となり、権現集落でディレクターが門ごとの表札を見て地図に順にブロックとしてゆき、ほとんどが鈴木だと表したのです。なるほどこれは分かりやすいと感心。

取材チームは保泉寺に行き、榊原住職から興味深い内容の話を聞きました。

放送された番組を見ると、佐藤と鈴木は時代の頂上の人とどちらが多く繋がっていたかの頂上決戦でした。

この番組は9月3日に放送されました。

(鈴木忠)

浜風会会報第37号
篠原協働センター同好会「浜風会」
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木忠 鈴木理市
藤田博辞 山中道弘
発行責任者 山下勝彦
発行 令和3年1月1日